

# 子ども同士の主体的な関わりを育む食育活動

指導栄養教諭 寺中 純子

高等部首席 豊島 秀多

## 1 はじめに

食育推進法第1章第6条では、「食料の生産から消費等に至るまでの食に関する様々な体験活動を行うとともに、自ら食育の推進のための活動を実践することにより、食に関する理解を深める」とある。そこで本校では令和元年度より給食室での作業の一部を子どもたちが経験し、食についての学びを体験的に深めることができるよう取り組んでいる。食材に触れる経験の少ない子どもが多い中、この活動により調理の楽しさや大変さに気付くことができ、調理員への感謝の気持ちや食への興味・関心を広げることができている。本活動が例年のイベントで終わるのではなく、日々の授業にも繋げていけるよう学校全体で取り組むことが大切である。令和3年度はこれまでの実践を更に発展させるべく、食育推進担当の指導栄養教諭と、交流および共同学習推進担当の首席とでチームを組み、校内のより多くの児童生徒を対象とした食育活動を推進できるよう取り組む。そして交流の活動を併せて行うことで子ども同士が主体的に関わりを持ち、活動を通しての子どもの学びがより深いものとなり、達成感を充実させることができるよう設定したいと考える。

## 2 授業の概要

### 1) 対象児童生徒

小学部の児童と、中学部または高等部の生徒がともに学ぶ環境を整える。授業ごとに対象となる児童生徒を変更し、校内のより多くの子どもたちが体験できるよう設定する。

### 2) 授業名

「給食室のお手伝いをしよう」

### 3) 期間

令和3年5月より11月の中で、ひと月に1回を目安に実施する。

## 3 授業のねらい

### 1) 対象児童生徒の実態と課題

過去の活動の中で子どもたちは体験活動へ意欲的に参加し、食に対する関心意欲を深めることができている。しかし子ども個々にとって体験的で楽しい活動が展開されているものの、役割意識をしっかりと持つことや他者との関わりが薄く、活動の広がりを持たせることに課題がある。

### 2) 授業の目標

- ・給食準備の大変さや手伝いの意義を考え、手伝いの活動に役割意識を持つ（全児童生徒）
- ・上級生に手伝ってもらいながら設定された課題を達成する（小学部児童）
- ・手伝いのポイントを小学部の友だちへ伝え、サポートしながら課題を達成する（中学部高等部生徒）

### 3) 指導支援の方法

- ・上級生に対しては事前学習を実施し、手伝いのポイントをあらかじめ伝え、活動内容も経験しておくよう指導する。
- ・小学部の友だちに対して手伝いの内容を説明する場面では、可能な限り上級生に任せて役割を果たす

ことができるよう促し、難しい場合にのみ教員が補足するよう支援する。

- ・上級生と小学部の児童がペアになって活動できるよう促す。
- ・指導栄養教諭が活動内容の具体的な説明を行い、首席が児童生徒の役割意識を高めるような働きかけを行うように教員の役割分担をしておく。

#### 4 授業の内容と経過

##### 1) 教材及び授業の設定

翌日の給食に使用される食材を活用し、調理前の皮むき作業を活動内容とする。授業は事前学習・体験活動・給食時の校内放送の3つで構成し、以下のように設定する。

事前学習	中学部もしくは高等部の生徒（上級生）が事前に活動内容を把握し、小学部の児童へお手伝いのポイントを伝えることができるようになることを目標に取り組む。
体験活動	教員が授業の趣旨を説明し、上級生が主体となって活動を展開できるよう指導する。上級生と小学部の児童がペアになって作業を体験することができるように設定する。
校内放送	上級生と小学部の児童から代表者各1名程度を選抜し、体験活動の感想を校内放送で発表して学校全体へ共有する。

##### 2) 子どもたちの主体性を引き出すための工夫

- ・上級生に対して、生徒の役割意識を高めるよう発問を工夫する。
- ・毎日用意される給食の量や調理員さんの大変さを説明し、お手伝いを行うことで学校全体の手助けになることを伝え、児童生徒の役割意識を高めるよう工夫する。
- ・その日の課題となる食材の示し方を工夫し、食材の多さを実感したりみんなで力を合わす必要性を感じ取ったりできるよう設定する。
- ・校内放送や給食室前の掲示を活用し、児童生徒の主体性を育むことのできるよう工夫する。

#### 5 結果（学習指導案は別紙参照のこと）

事前学習を行うことで上級生らは「小学部のみんなに教える」という役割意識を持ち、主体的に活動へ参加できた。そして事前学習で学んだことを活かし、小学部の児童に対してわかりやすい言葉を自分なりに考え、優しい口調で接する姿が見られた。また自分たちが頼りにされているということに対して自信を持ち、授業の準備や片付けにも積極的に参加した。代表者による校内放送の取組でも上級生が小学部の児童をサポートしながら放送内容を考え、リードしながら活動することができていた。小学部の児童は上級生のサポートがあったことで、すぐに質問したり活動を補助したりしてもらえたことで安心して活動へ参加できた。また通学バスや別の活動で知り合った関係性のある児童生徒は、より張り切って活動へ参加するようすが伺えた。集中力の持続に難しさのある児童が黙々と作業に取り組み、最後まで集中が途切れることなく参加する姿も見られた。中学部・高等部のお兄さん・お姉さんとの関わりを楽しみ、作業の仕方や名前を積極的に尋ねたり、自分からお礼を言ったりする児童もいた。本授業での子ども同士の出会いがきっかけとなり、継続的な関わりへと発展する場合もあった。

#### 6 考察

##### 1) 役割意識を強調した効果

本実践では事前指導の中で上級生に対し、「小学部のみんなに先生二人だけで教えることは大変なの

で、みんなの力が必要であり、とても頼りにしている」と伝え、生徒の役割意識を高めるよう工夫した。そしてお手伝いの活動は「小学部のみんなのために」「学校みんなのために」と強調したことで児童生徒の役割意識が育まれ、主体性を引き出すことができたのではないかと考える。報告者は実践の中で、支援学校の授業実践では児童生徒へ役割意識を育む仕掛けが、子どもの主体性を引き出す効果の大きい働きかけであると強く実感している。子ども自身が頼りにされているという発問の工夫は、多くの授業で効果的ではないだろうか。

## 2) 教材の提示方法の工夫と教員の演技力

その日の課題となる食材を提示する際に、食材を一か所に集めて児童生徒へ示すことで、食材の多さを実感する声かどの学年からもあがった。インパクトのある提示の方法や、教員自身も「こんなにたくさんあったら大変だ～」と演技することで、子どもたちはみんなで力を合わす必要性を感じ取り、課題へ向かう主体性が発揮されたと考える。また目の前に視覚的な実感の得やすい解決を迫られる課題があることは、作業が進むごとに減っていく食材から視覚的な達成感を得ることもできやすく、子どもの集中力が高まったように考える。普段多動傾向にある子どもの集中力が高まった要素も視覚的効果から得られたように感じる。

## 3) 活動の内容を全児童生徒へ周知することの効果

本実践では授業後に校内放送による参加者の感想の共有、指導栄養教諭の作成した給食室前の掲示を活用した活動内容の周知を行った。これらの取組は参加していない児童生徒にも「なんだろう」「自分もやってみたい」と考えるきっかけになり、学びに向かう姿勢を育む効果があったのではないかと実感する。実際に報告者に対して「次は私たちも参加させてください」と申し出る児童生徒がいたことから、その効果を実感できる。参加者らは自分たちが学習したことに対して自信を持ち、また次の学習へと主体的に参加する意欲を育むことができたのではないかと考える。

# 7 おわりに

## 1) 指導栄養教諭より

3年前には希望する単学年の一部でのみ本実践を展開していたが、今年度は首席とチームを組むことで、首席が学部や学年間を繋ぐパイプ役となり異学年交流に発展させることができた。コロナウイルスの感染予防対策で人数制限や学習環境の設定に難しさがあり、全校の児童生徒が本実践へ参加することはできなかったものの、小学部については全児童が参加できた。実践を振り返ると、中学部や高等部の生徒が小学部の児童に対してどのように説明すれば伝わるのかを試行錯誤している姿が印象的であった。小学部の児童もその説明を一生懸命に聞きながら進んで活動する姿があり、皮むきの作業だけでは得られなかった食育の活動に発展できたと実感した。校内放送では以前まで担当者である教員のみが実施していたが、体験した児童生徒が活動の感想を発表することで学校全体へ給食準備の大変さが共有され、残食率の低下にも繋がっている。身近な給食を通じた体験活動を今後も継続することで、児童生徒の食への興味関心を広げ、児童生徒自らができることを少しでも増やしていけるよう、学校全体の活動として取り組んでいきたい。

## 2) 首席より

この一年間の取組の中で本実践は、考察3)でも述べたように校内全体への広がりを実感できるような結果となった。それは児童生徒に限らず、教員の中にも「うちのクラスも参加したい」「自身の授業の一部として参加できないか」という声が聞かれるようになってきており、教員の参加意欲の高まりが実

感できた。また一部の学年では、今回の活動で出た野菜の皮を再利用して染め物を行ったり、スープのだしを取るのに使用することを考えたり、発展的な学習へと繋がったグループもあった。食育の活動が単発の特別授業として終わるのではなく、普段の授業との繋がりを持たせたり日常生活の中で活かせるようにしたりすることを、今後より検討することが課題である。そして学校全体を巻き込んだ実践へと更なる発展に期待が持てる。